

## ヘリ被害者への罵声

最近フェイスブックの投稿から知ること多いが、信じがたいニュースが流れてくる。これも最初フェイスブックで知ったが、毎日新聞 2 月 11 日の標題の記事もその一つだ。

リードから一佐賀県神埼市での自衛隊ヘリ墜落事故で、家を失った住人がネット上で罵声を浴びている。沖縄で相次ぐ米軍ヘリの不時着や部品落下の事故では「それで何人死んだんだ！」と国会でやじが飛んだ。基地のそばで不安を抱え生きる人びとへの想像力が、失われかけていないか。

悲しいかな、これが日本の現実なのだろうか。政治の劣化が社会に影響しているのだろうか。心が寒くなるような記事を紹介しておきたい。



(写真は朝日新聞 2 月 6 日 1 面)

自衛隊ヘリが墜落した際、家に一人でいた女兒(11)は軽傷で奇跡的に難を逃れた。翌日、父の「許せないですよね」というコメントが新聞で報じられると、ツイッター上に非難の投稿があふれた。

〈何様？ 墜落して亡くなった隊員の事考えねーのかよ〉

〈わざと落ちた訳じゃないし、許せないの意味が分からん〉

〈死ななかつただけいいじゃないか〉

戦後、本土でも沖縄でも基地周辺の住民が多数、軍用機の墜落で犠牲となってきた。横浜市で 1977 年 9 月 27 日、米軍偵察機が住宅地に墜落した事故では、土志田和枝さん(事故当時 26 歳)と 3 歳の長男、1 歳の次男の母子 3 人が自宅で全身やけどを負い、兄弟は間もなく死亡。和枝さんも 4 年 4 カ月後に死亡した。偵察機の乗員 2 人はパラシュートで脱出していた。

「お水をちょうだい。ジュースをちょうだい」。病床で苦痛を訴える全身包帯姿の長男は次第に衰弱。最後に「バイバイ」と言って息を引き取った。次男も「ポッポッポー、ハトポッポー」と父に教わった童謡を口ずさみ、兄の後を追った。母の和枝さんは皮膚移植を 60 回以上受け、治療中の配慮で 1 年 4 カ月間、我が子の死を知らされなかった。和枝さんの日記には「心配でいても立ってもいられない」と息子たちを案じる思いがつつられていた。

米軍基地の集中する沖縄では本土復帰前の 59 年 6 月 30 日、石川市(現うるま市)の

宮森小学校に戦闘機が墜落し、児童 11 人を含む 17 人が死亡した。給食時間中だった。当時 5 年生だった佐次田満さん（69）が振り返る。「衝撃で校舎が揺れ、炎と黒煙が立ち上がった。黒焦げになった男の子が長椅子に乗せられ運ばれていった」

国会でのやじの主は松本文明副内閣相。1 月 25 日、衆院本会議で共産党の質問の最中だった。松本氏は翌日、安倍晋三首相に「誤解を招いた」と陳謝し、副内閣相を辞任した。松本氏の事務所は取材に「コメントすることはない」としている。やじは裏返せば「誰も死んでおらず問題ではない」と受け取れる。「救いようがない。その冷酷さは政治家の失言史に残る」と評するのは、政治評論家の森田実さんだ。自ら辞める体裁をとった政府を「少なくとも辞任を認めず罷免すべきだった。対応が甘い」と批判する。「昔なら議員辞職ものだが、そうならないのが深刻だ」

宮森小の悲劇を語り継ぐ沖縄県うるま市の久高政治さん（69）は「軍用機が墜落するかもしれない恐怖の中で暮らす人の気持ちを考えてほしい」と話す。ツイッター上での心ない非難や、国会での冷酷なやじには、そんな人びとへの想像力が決定的に欠けている。久高さんは、そう思えてならない。

(2018年2月17日)